

Title	オスマン・トルコ初期に於けるアナトリアとマワラン・ナフルの學術交流
Sub Title	Intellectual contact between Transoxiana and Anatolia in the early Ottoman period
Author	三橋, 富治男(Mitsuhashi, Fujio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1959
Jtitle	史学 Vol.32, No.2 (1959. 7) ,p.1(129)- 21(149)
JaLC DOI	
Abstract	<p>In spite of dissolution of the Islamic Empire toward the end of Middle Ages, the Eastern Islamic world still retained its position superior to the Western world. At least, one cannot perceive a great difference or a deep gulf between the two worlds after the Renaissance. Ottoman Turks who followed Osman established themselves firmly in Asia Minor and built up a large dominion there at the expense of Seljuk Turks before pushing into Eastern Europe. Thus, Ottoman Turks were profoundly influenced by pre-Ottoman civilized peoples. Their administrative regime and other systems were more or less under the influence of Byzantine Empire. But it would be possible to imagine that Ottoman Turks claimed themselves with pride as inheritor of the Islamic culture. Especially, Islamic cosmography with element of (Adjaib, which had been composed by Arabs or Iranians, were more accessible or available easily as sources of all knowledge for educated people. Nevertheless, Transoxiana played a leading role for practical activity and technical achievements in secular science. Concerning the contact between Anatolia under the rule of the Ottoman dynasty and Transoxiana under the rule of the Timurid dynasty, hitherto many of orientalist treated this problem from the view point of political and military negotiations. The present paper explains, first, the affinity between "old osmanli language" and "Chaghatai literary language as lingua franca in the Central and the Western Asia" with aboriginal sources; second, the practical activity and technical achievements transplanted by the most representative and outstanding scholars, for example, Fenari Shemsettin Mehmet, Kazi Zade Rumi, (Ali Kushdju, and Mirim Chelebi who served as guide for later generations. This paper consists of three main parts: 1 Intellectual tradition of Ottoman Turks; 2 School of Transoxiana; 3 Devotion of Scholars connected with both areas.</p>
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19590700-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

オスマン・トルコ初期に於ける

アナトリアとマワラン・ナフルの學術交流

三橋 富治 男

- 一、はしがき
- 二、オスマン・トルコの學問傳統
- 三、マワラン・ナフル學派の抬頭
- 四、學術交流に關與した學者群
- 五、むすび

—

イスタンブールのトプリカプサライ故宮博物館所藏の若干のアラビア文・イラン文の古文書につき、ベキル・ストク・バイカル（アンカラ）は解讀を試み、*Türk Tarih Kurumu* の《*Bulletin*》誌 Cilt XXI, Sayı 82, Nisan, 1957 にて當該資料の解題を行つてゐるが、そのなかで「形成期に當る初期オスマン國家にとつてその存立を脅す眞に國家的危機が一四〇二年から一五一四年までに三つ存在した。第一はティムールから、第二はトルクメン白羊部（アク・コユンル）のウズン・ハッサンから（ティムール）の（後七〇年）、第三はサファヴィ王朝のシャー・ロイス・マイールから（ウズン・ハッサン）の（後四〇年）到來した。

オスマン・トルコ初期に於けるアナトリアとマワラン・ナフルの學術交流

（二二九） 一

それらの要因はいずれも西部國境よりは「東部國境の彼方から到來する共通點をもつ」と述べているが、とりわけて第一はオスマン王朝を中絶せしめて國家活動を振出しに引戻す作用を演じた。それにも拘らず小アジアと内陸アジア方面とは實利實益な學問分野では反つて緊密化の傾向が見受けられ、ことにマワラン・ナフルがアナトリアに對し與えた刺激はオスマン知識層の啓發に一つの段階を劃するものと思われる。嘗つてフアトキョプリュが長文の論考《オスマンリ制度に對するビザンスの影響》(Türk Hukuk ve İktisat Tarihi Mecmuası, 1931. İstanbul, Cilt I)で述べたように制度構成面で寄與したビザンティン方面の影響を顧慮するとすれば、それと並んで茲に取扱う實利實益的な學問分野で寄與したマワラン・ナフルよりの影響も又顧慮されて然るべきものと思う。たゞし從來後者との關係は當然の成行ながら専ら政治・軍事上の觀點にのみ基準が合せられているためか可成り重要な側面が無視されているのではなからうかと考へ一應資料紹介をも兼ね含めての論考を試みる次第である。

茲に貴重な紙數の許與に對し深い謝意を表すると共に示教と叱正とが仰がれるならば幸である。

二

元來イスラム宗教國家に於ては宗教的な行事、祭式、勤行を所與所定の日月時刻を關連して間違なく果すべき必要から觀察者の眼を天に向けしめ、乃至は又實生活とは幾分遊離はするが人間の知性を満足せしめるために日月星辰の關係を調べるが行われた。その他偶然の現象から何らかの法則性を捉えようという目的で天體の運行に關する關心が高められて行き、天文・數學的方法と統計的な敘述を併用する傳統をもつていた。(註1)

同時にまたそうした天體の實際觀測のほかに日月星辰の位置が自然界や人間界に及ぼす支配力や影響力を考慮して

占星的に事物の吉凶禍福を卜つて幸運の時をさぐり求める功利的な動機（王者の場合には軍事をも含めて）が認められる。Baron Carra de Vaux が指摘するように當時の通念では、天文學と占星學とは同義語であり、天文學は占星學者を兼ねていた。⁽²⁾ 端的にいつて天文學は占星的に發達してたと見てよからう。恐らくは A. H. 154 (A. D. 770) にヒンズーの學者マンカがバクダードに將來したインドの Siddhanta もこの意味で受容されていると思う。⁽³⁾ そした性格をひそめた天文||占星學は、まもなく術語的にコスモグラフィヤ、すなわち《天地世界誌》と呼ばれるものを敘述するためのイントロダクションとしての役割を演じていった。

しかもイスラミック・コスモグラフィと呼ばれるものは、コスモロジイ⁽⁴⁾《宇宙學》と重複し合う關係に於て、宇宙の形式論、形態論、天體運行論、日月星辰の性質、大地の形狀、地表の風土、氣候帶、雲、雨、雷鳴、稻妻、虹の如き氣象學的現象やら、鑛物岩石學、植物學、動物學、人類學その他神學、形而上學などの各領域にひろくわたり、最も包括的な意味に於てアツラ神の全創造物を敘述する性質のものとなつていった。

例えばイスラミック・コスモグラフィを代表するアブー||ヤハヤ||ザカリヤ||ビンムムハンマッド||ビン||マフムトアル||カズヴィニ (A. H. 600 Circa-182. A. D. 1203-1283) の著述を通じて眺めるとその典型的な構成が判然とする。それは二大部門から成り立ち、第一部門は、天空に關する事項を取扱い、詳細な序説の後に、天體、日月星辰、次いで天の住人すなわち神學上のエンジェル（天使）が取扱われ、年代學に關する章句で結ばれている。第二部門は、大地に關する事柄を取扱い、地上に生起する諸現象、火、大氣、水、それに鑛物岩石、植物、動物の三世界、最後に人間が取扱われる。

《Adjâib al mahluğât》すなわち「造化の不思議」と名づける書冊の内容からみるとそういう風に受け取れる。しかもそれは前代の典據に新しい知見や資料を加え漸次内容を補修しながら或いは翻譯、或いは採收の形で次の世代に踏襲

されて行く傳承形態を取るのが普通であつた。そうしたいわば百科全書的に論述された知識内容の集積と、必要に応じてその一部を抜萃して構成される天文・地文を含む博物誌の輪廓なるものを觀察する場合、*Popular Cosmography*と密接不可分に結びついた《アジャーイブ》ないしは《ガラーイブ》の概念を勘考しないわけにはいかない。Adjāib とは *Steingass* に *wonder, surprise, Bapařov X. K.* と譯述され、現在のトルコ語では *Acayip* と綴りて表わむ *İbrahim Alâettin Gövsa* の *«Resimli Yeni Lugât ve Ansiklopedi (1954)»* などでは *Akla ve alşkanlığa aykırı şey* 「理解を超えたよく知られない事柄」、一般の共和國トルコ語辭典類では、名詞として「奇事」「奇異」、形容詞として「驚異すべき」の意味に説明されている。その語原學的研究について、スペインの回教學者(バルセロナ)の *Dabler, C. E.* によると、人々の驚異に價すべき事柄で、はじめは特に古代に於ける驚異を表示し、コーランに於ては神の創造物についての驚異の意味を含んでいる。例えば、古代の神殿、神像、墳墓、シグラートなどを含む特殊の造營物とか、實際に山岳地帯などで觀察した天然の氣象とか電磁氣現象に關係ある記述などに及んでいるようである。ところで、*Dabler* は論及していないが、アラビア語やイラン語で *‘Adjāib seb’a’* という、特殊の造營物、エジプトのアフラム(ピラミッド)、バビロンのセミラミスの懸崖庭園、オリンポスにあるゼウス神殿に安置された黄金と象牙でできたジュピターの神像、ロードス島の港の入口にある六十メートルの青銅像、アヤスルクにあるアルテミス(ダイアナ)の拜殿とか、ハリカルナッソス(ボドルム)の靈廟の内部にある大墳墓、アレキサンドリア港口の百二十メートルの高さの燈臺などを指し、*Adjāib* を敢えていうならば我々のよく口にする七不思議の「不思議」に類する事柄であるが、*Dabler* によるとアジャーイブは單に空想的な氣まぐれの所産でなく、事物の可成り精細なしかも正確な觀察に基くものをも含み、そのうちには比類なき文献資料價値をもつものもあつた。だ

がそうした概念は時代と共に經年變容をとげ、眞實の觀察以外の要素をつきまぜる傾向が濃くなつていつた。例えばイランの航海者ボズルグ・ビン・シャフリアルが自己の回顧談と他の旅行者の報告を綴り合せて《Adjaib al Hind》を著わし、この時代に於ける他に替えがえない書冊を提供しており、そのうちに比類なき價値を見出すものであるが、次の如き陳述を以つて説き起している。神は創造物の驚異を十の部門に別つ。そのうちの九は東方世界に、一がそれ以外の地域にある。東方世界に屬する九のうち八がインドと中國に屬し他の一のみが東方のほかの地域に屬するとし、東アフリカ沿岸、インド、東南アジア島嶼に關する奇異な見聞を示している。⁽⁶⁾それらの或るものは、實際の觀察のほか民間傳承的な見聞を加えて、フォクロアの研究によつてのみ説明しうる要素とが混淆している。A. H. 四世紀、A. D. 十世紀頃となると遠隔地域のアジャーイブについてはそれにふさわしい敘述形式が生れる一方、イスラム世界のアジャーイブについては、いわば地理學的な論述の註解的な附録物と化し、⁽⁷⁾更に A. H. 六世紀 A. D. 十二世紀頃となると從來個々ばらばらであるところの動物學的、人類學的、考古學的な解明などがさらに加わつて特殊の一つの文献敘述の形態にまとめられて、いわゆる Tuhfa. Tuhfat の形を生じた。例えば、Abu Hamid al Gharinati の《Tuhfat al-albab》などがそうした集大成を示している。Tuhfa とは Steingass によると present, favour, tribute, anything precious beautiful rare and fit object for a present, masterpiece. Deny, J. によつて chose précieuse et rare などと譯述されているが、貴重な贈呈物の意であろう。かく實際觀察に基づく學識を輕視する傾向が著しくなり實際の學識といわば想像的所産との間の均衡が破れるにつれてアジャーイブは頗る愛好されることとなり、しかもアジャーイブは専ら Popular Cosmography の枠のうちで非常な發達をみるに至つた。ミュンステル大學のフランチ・テシナは嘗つてオスマン・トルコの地理學乃至地理學的知見に關する専門的論考《Die Geographische Literatur der

《Osmanen》(Z. D. M. G. 1923) に於て *Adjaib* を *Mithologische Kosmographie* と稱しているが、⁽¹²⁾ そうした側面も強く打出されている。テシナが、オスマン・トルコの學術を以て「壓倒的に優勢な外的影響のもとに出發する狀況におかれていた」とみなし、しかも又カール・プロツケルマンが「アラビア文學史」にて述べるようにこの時代のムスリム學術がビザンティンの影響を何らかの形で受けたという事實を明瞭にしえないものすれば、⁽¹³⁾ 右様ムスリム學術傳統は殆どその儘にオスマン・トルコの學術發展過程のうちに織り込まれていると見るべきでそれも決して單なるまぎれ込みといつた性質のものでなく歴史的、社會的また心理的に背景をもつ同源、近縁のものであることを知るにちがいない。

以上の縷述を要約すれば *al-Qazwini* を以つて代表される *Popular Cosmography* は初期オスマン・トルコ社會に移植されて、爲政者や有識者の日常生活に於ける知識源として役立つたものであり、例えば最も古い博物誌著述者としてルクン・アル・ディン・アフメットがスルタン・メフメット一世 (1402-1421) の需めに應じて翻譯して献本した著作は、カズヴィニの有名な《*Adjaib al mahlugat*》を譯出した、コスモグラフィクな百科全書といわるべき性質のものであつた。⁽¹¹⁾ 又ムラト二世 (1421-1451) の時代にメフメット・カジ・マニアシ・ザーデが《*Kitab al 'adjab al 'udjab*》をあらわしているが、⁽¹²⁾ これも、アジャイブ系統のもので、神役をつとめる天使や、火焰で作られる幽鬼に關する俗信から算數の初級提要をも兼ねる幅の廣い内容であつた。この時代にはハッサン・アル・ディン・トカッティが天空に於て七色に輝く虹の現象に關する論述を神學的論及と關連的に行つてゐるが、これもアジャイブ的な論考といえよう。やゝおかれてヤズジィ・オウル・アフメディ・ビジャン (1455歿) は一四五三年に短いコスモグラフィの要約書《*Adjaib al mahlugat*》を著わしているが明らかにカズヴィニの同名の原著に依存し、これを拔萃したものである。⁽¹³⁾ 因みにこのヤズジィ・オウルは東部トラキヤのガリボリの出で、《ムハメディヤ》というマンズーム(韻を踏んだ長編詩)の作成

や、スーフィ文學の面で卓越した地位を築いたヤズジィ||オウル||メフメット||エフェンディの兄弟に當る。かくカズヴィニの原著が繰りかえし譯出し、佚名著述のそれを含めて多くの亞流が簇生したのはアジャイープという様式をもつ百科全書的著述を受容する中世特有の心理と嗜好とが作用したものであるといふべく、オスマン・トルコ人がイスラムの博物誌という坩堝のうちから自己の知見を形成していく経過の一階程を示している。

だが初期オスマン・トルコの場合、如上の Popular Cosmography の立場より一そう注目されてよい實證的學問尊重の態度が發生していることをネグレクトすべきでない。以下述べようとするマワラン・ナフル學派の導入がそれであつた。

註

- (1) Uṭm al-Adjam, Uṭm al Awa'il としてアラブはバビロニア人の經驗、ギリシヤの技術と一言に總括されるような西亞の內容變化に富む學統をうけつぎバトラミウス||アル||カラウズイ(クラウデウス・プトレマイオス)の影響のもとにそうした傳統が培われた。
- (2) The Legacy of Islam. 1952 Oxford. Astronomy and Mathematics. p. 376-397.
- (3) このインドの天文書は、シナにも移植されており、唐の瞿曇悉曇開元占經に系統を引いている。藪内清「支那の天文學」昭和十八年、東京、一四七頁。善波周「印度の科學技術」昭和十九年、東京、二六五頁。
- (4) Levy, R.: The Social Structure of Islam. 1957. Cambridge, Chap X. p. 458-505.
- (5) 上掲 Gövsa 同條項。
- (6) アラビアン・ナイトのうちの船乗りシンドバッドの説話の如きは、シヤフリアルの記述から轉化した興味本位の變形的アジャイープの様相を示している。
- (7) Mas'ūdi, Kitāb al-tanbīh などがその例とされる。
- (8) Band I. Heft 1. s. 39 脚註參照。

この事項に關する限りのイスタンブル大學のイブラヒム・ハック・アクヨルの *Tanzimat devrinde bizde coğrafya ve Jeoloji* 1940, Istanbul. は、フランス・テシナの論及を殆どそのままに近い形でトルコ語で譯述したものである。

- (6) Brockelmann, C.: *Geschichte der Arabischen Literatur*. 1902. Berlin. II. s. 223.
- (10) al-Qazwini の *Cosmography* の歐譯には *Wüstenfeld*. Göttingen, 1848 の獨譯がある。
- (11) (12) Adnan, A.: *La Science chez Turcs Ottomans*, 1939. Paris. p. 19.
- (13) Gövsa 同條項。

三

抑々オクソス・ヤクサルテスの河間で、ザフラシャン河谷に臨む地域、アラブのいわゆるマール・ワラーア・アル・ナフル（マワラン・ナフル）の地は嘗つて羽田亨博士の「西域文明史概説」や「西域文化史」の流麗な縷述が解明しているように、古代にはグレコ・バクトリア文化の影響を受け、その後は、佛教、祇教、摩尼教などが流布し、イスラム教の東漸後はムスリム・マワラン・ナフルと幾變遷をとげ、アブー・ナスル・アル・ファラービー（ファラーブ生 A. D. 873?-950）、イブン・シーナ（アウイケンナ、ブハラ生 980-1037）、アル・ビールーニー（ヒヅア生 973-1048）などの卓越せる哲學者、博物學者、天文・數學者を生み出した。とはいえ、この面で根を深くおろすような學問の傳統をうち立てるまでには至らなかつた。たゞムスリム神學の領域ではこれとは全く事情を異にし、ムハマッド・イサー・テルミディ（テルメズ生、九世紀）やムハマッド・イブン・アリ・テルミディの如き神學の權威者を出し、前者はハデースの集成者として、後者はハキミ・デルヴィシュ・僧團の創立者としての名譽を擔つており、宗教指導者の輩出によりモンゴル時代にはステップ地帯の縁邊の隨處にカナカフ（僧院）を點綴するなどムスリム世界でも特殊の地位を占めていた。さてこの地域を中心にチャガタイ・ハーン國の殘存領土からトルコ・モンゴルの政治・軍事組織とムスリム文化主にイランのそれを結

合してティムール政權が勃興するに及んで、¹⁴⁾ マラワン・ナフルでは顯著な變化があらわれ始めた。

「茅ぐみながらも伸び得なかつた文化は、春の草木にも似て俄に枝葉を張り、やがてとりどりの色香か誇るトルコの花と咲き出でた。アルタイの谷に根ざしそめてから初めて咲いたこの花は、實に跛者帖木兒の武骨な手に育て上げられた」のである。¹⁵⁾

イブン・アラブシャヤが《Adjaib al-maqdur》で述べるようなティムールの醫學・天文學尊重の氣風に端を發して、この王朝時代は政治上の紛争をよそに文化面での輝かしい世代を現出した。例えば文語としてのトルコ語がイラン語に優越することを立證して遙かなるオスマン文人達に多大の感銘を與えたミール・アル・シル・ネヴァイ (MIRTAJI)、書道を通じてミエアチュール藝術の發達に寄與したバイスンカール、建築ではサマルカンドのグル・イ・ミール (ティムール廟) を建設したマフムード・イスファハーニーなどがある。とりわけて茲では、ティムールの孫で後繼者たるウルク・ベクの精密科學面での學究活動と、この王者をとりまく學究者たち、例えばこの時代のプラトールを稱せられるサラフ・アル・ディン・ムサ・イブン・マフムード・カージ・ザ・デールミなどを通じてアナトリア方面、惹いてオスマン王朝との關係が問題點となるのである。ウルク・ベクの人となりや、王者としての治績、サマルカンドを中心に展開される私生活の側面は久しく歐州の東方研究者の論考のテーマとなつており、とりわけ、バルトリドの「中亞史に關する四つの研究」のよう¹⁶⁾ 《Ulugh beg private life and scientific occupation》に要約することができる。ウルク・ベク (A. D. 1395-1449) は明朝とも永樂十三年より使節を交換した關係もあつて明史卷三三二撒馬兒罕の條で頭目兀伯と呼ばれて、開明的にして學識ある王者にふさわしい公正な人物として知られ、政治的・軍事的な經歷に於てこそ見劣りがし、在位も比較的短期間 (二ケ年八ケ月) とはいえ當代隨一の數學者、とくに天文・占星學者で、天文學に關する情

熱は新式觀測儀の發明者たらしめ、業績は天文 \parallel 占星面でキプチャク \parallel ハーンに多大の影響を與えたナスル \parallel アル \parallel ディーン \parallel トゥスイのそれに匹適し歿後には眞の天文學者なしとまで云われ、サマルカンドに建設した大規模の天文臺は世界の驚異とされた。次に引用し逐次譯を付するゼヒール \parallel アル \parallel ディーン \parallel ムハマッド \parallel ハブール (A. D. 1482-1530) の回想録、すなわちチャガタイ文《ビーブル \parallel ナーメ》の A. H. 903 (A. D. 1497) の條は本論考の纏述に必要なもの意味を含んでゐる。(便宜上ローマナイズする)。

「Timur-bek-ning nebayiri Djhanghir-Mirza-ning oghli Muhammad Sultan-Mirza Samarqand-ning
 タイムールベクの 孫、ジハンギル ミルザ の 息、ムハマッド スルタンミルザは サマルカンド の
 [王族の稱號]

tash-qurghan-i-de chiqarda bir medrese salib-tur. Timur-bek-ning evlad-i-din her kim-ghe Samar
 石(の) 城 塞に於て 目に立つ一つの 學 林(を)建てゝゐる。 タイムールベクの子孫達から 各自にて サマル
 gand-te padishah-liq qilb-tur. Olar-ning qabr-i ol medrese-de-dur. Ulugh-bek-Mirza-ning 'imaret-
 カンドで 王 位に 即いでゐる。 それらの 墳墓はその 學 林にある。 サルグ ベク ミルザ の 造營物
 lar-din Samarqand gale-si-ning ich-in-de Medrese Khanagah-dur. Khanagah-ning gyunbed bisyar
 のうちで サマルカンド 城 塞 の 内部にある(のは) 學林(と) ハナカフ である。 ハナカフ の 圓天井は 非常に
 ulugh gyunbed-dur. 'Alam-da ancha ulugh gyunbed kim nishan bel-ur-lar. Yana ushbu medrese
 壯大なる 圓天井である。 世界には 澤山の壯大なる 圓天井があるがこのもの造營物が名高い。 さらにこの様なものは學林(と)
 Khanagah-ghé yuq. Bir yakhshi hammam salib-tur Mirza hammam-i-ghe mesheher-dur. Hem
 ハナカフ には ない。 一つの 美しい 浴場が建っている(が)ミルザの浴場は(として)有名である。 總じて
 ulugh tash-lar-din fersh qilb-tur. Khorasan ve Samarqand-te niche hammam m'alum imes. Kim
 壯大なるいは石で(床は)鋪装してある。 ホラサン と サマルカンドではこれほどの浴場は知られてゐない。 このものが

bolghan-i yana mederese-ning djenub-i-da bir masjid salib-tur. Masjid-i muqatta dir-ler. Bu
つゝつたものとしてさらに 學 林 の 南 に一つの回教寺院が建っている。マスジツヂイムカッタアという。この
(彫刻のある回教寺院の意)

djehit Tin muqatta dir-ler. Kim git'a yaghach-lar terash qilib islīm-i ve Khitayī naqsh-lar salib-
方角は テソ ムカッタア という その各部分は 木 材 に 彫刻が施されて 裝飾 や 中國風の種々の意匠が用いら
tur-lar. Tamam duvar-lar-i ve saqfi ushbu yusun-luq-tur. Bu masjid-ning qibla-si bile medrese
れている。すべての 壁 や 屋根 そのものが苔むして いる。この回教寺院 の キヅラ と 學 林
masdjid-i-ning qibla-si-ning ara-si-da bisyar tefavut-tur. Ghaliba bu masjid qibla-si-ning semti-ni
回教寺院 の キヅラ の 間 では 非常に 相違して いる。多 分 この回教寺院 のキヅラ の 方 角 を
munedjem tariqi bile 'amal qilib-tur-lar. Yana bir ulugh 'ali 'imaret pushte Kohik daman-i
天體觀測の方法で 定め て ある なお又一つの 壯大な 高い 造營物が 丘 陵 コヒク(の) 裾(にあるが)
seyyida rasta-khane-dur kim Zeidj imek-ning alt-i-dur. Uch ashian-liq-dur. Ulugh-bek Mirza
王立の天文臺 である のだが天文表を作成するの 場處 である。三 階立て である ウルク ベクミルザは
bu rasad bile Zeidj-Gurkan-ni bittib-tur kim 'alam-da hala bu Zeidj mustamel-dur. Özge zeidj ile
この觀測所を用いてセイジグルカニンを 生み出しているのだが世界で 現今までこの天文表 を 利用 している。他の天文表で
kim amal qil-ur-lar. Mun-dan borun Zeidj Il-khan-i mustamel idi kim Khuadja Nasir Tus-i
間に合せている者もある これより以前には イルハニの天文表を 利 用 した のだがフアジヤ ナスイル トースイ
Hulaghu zaman-i-de Maragha-de rasad baghlatib-tur. (A. H. 657) Hulaghu-khan
が(作成したもので彼は)フラゲ(ハン) 時代 に フラガ(地名)に 觀測所 を 創建して いる フラゲ ハンは
kim Il-khan hem dir-lar. Ghaliba 'alam-da yeti sekiz rasad bish baghla-may-dur-lar. Ol djumle-din
イルハン と名のつて いる。恐らく 世界 では 七 八の 觀測所 より外には 創建 されて いない。その 全 體 の

bir Mamun Khalife rasad baghlab-tur kim Zeidj-Mamun-i an-din bitib-tur-lar. Bir Batlamyos ham
 一つはマムーンカリフが 觀測所 を創建しているのだが マムーンの天文表をそこから生み出している。一つはプトレマイオスが
 (アラバス朝カリフ)

rasad baghlab-tur. Yana Hindustān-de Radja Bekirmadjit Hundu zaman-i-de Udjayin piyar-da
 觀測所 を創建している。さらに ヒンドスターンでは ラージヤベキルマジットがヒンズーの時代に於てウヂヤイン 國 で
 kim Mālvahmalik-dur hala Mandu meshehur bir rasad qilib-tur-lar kim hala
 すなわち マールウア王国 であるが 現今ではマンドウ(という名で)知られているが一つの觀測所 をつくっているのだが 現今まで
 Hindu-lar-ning mustamel Hindustān-da ol zeidj-dur, bu rasad-ning bish yüz seksen tört
 ヒンズーたちの 利用している(ものは) ヒンドスターンではその天文表である。この 觀測所 の 五 百 八十 四
 (が創建されてから)

yil-dur」…
 年 である

以上は《バールナーメ》の一齣を逐次譯註したにすぎないが、マワラン・ナフルは精密科學とも稱すべき實測的
 な天文學、數學などの隆昌という點で當時のイスラム世界に冠たることに示されている。Eugene Schuylerが
 《Turkistan, Note of a Journey in Russian Turkistan, Khokand, Bokhara and Kuldja, 1876. London》
 のサマルカンドの條で引用する《バールナーメ》の一節は右原文の抜萃にすぎないが、その補説によるとコヒク丘
 陵は、今は Tchupan Ata とよばれる由であり、一九〇七年に帝政ロシアのヴァトキンによつて天文臺址が発見され、
 彼の報告によるとその高さはイスタンブールのアヤ・ソフィヤ大伽藍に匹敵しうるとなしている。⁽¹⁸⁾ 前嶋信次教授の「日
 持上人の大陸渡航について」によると天文臺の内部觀測装置をティムール王朝の史家カマール・アル・ディン・アブド
 ル・ラッザクの《Matla al Saddain》の陳述に基き「ほこらかに天空にそびえたつこの建物の中に九天を現わす見る

も楽しいほど美事な細工になる圓球や天體圖や地球儀 (Hay'at Kurat arz) や詳細な氣候帶圖などを或は備えつけ或はえがかしめた」となし⁽²⁰⁾ 《バーブル||ナーメ》で述べる有名な天文星位表《ゼイジ||グルカニ》もこの天文臺の觀測に基き作成され Sédillot の《Prolegomenés des tables astronomiques de Oloug Beg. Paris. 1847-53》などによると遊星の運動や恒星の位置を記載する第三部・第四部は當時のイスラム科學の粹であつた。なお茲で特筆すべきは右譯註によつて判然とするように、チャガタイ||トルコ文語は、古典オスマン語(エスキ||オスマンルジャ)と殆んど同様の語彙と文脈とをもつ近似性のものであつて、⁽²¹⁾ 中、西亞のリング・フランカとしてのチャガタイ||トルコ語を仲介に、そうした文語の共通性の故に、初期オスマン・トルコの知識人たちは、容易にマワラン・ナフルと親近感をもちえたり、必要に應じて知的交流を行いうる便宜も與えられていた譯であつて、むしろこの事柄は本論考では、より一そう注目されて然るべきであらう。

宛もマワラン・ナフルやホラサン方面にて開花したティムール王朝の文學・美術が、他のムスリム王朝、例えば、イランのサファヴィイ王朝に、又インドのムガル王朝に著しい影響と刺激を與えた如く、學術面ではオスマン王朝の精神生活面、科學的な頭腦訓練の面で深い影響を與えることになつたのは右のような事情が介在したからに他ならなかつた。

註

- (14) Barthold, V. V.: *Four Studies on the History of Central Asia*, 1958, Leiden, Vol. II. *Ulug Beg*. p. 1. 5-6.
- (15) 羽田亨博士「西城文化史」昭和二十三年、東京一六六頁。
- (16) VI, p. 129-143.
- (17) ティムールの五世の孫、ヒンドスターンのスルタン。
- (18) 舊東インド會社附設圖書館所藏本による。バーブル||ナーメはこの面での根本資料であるが、言語的に見ても素朴な文體、簡潔

な表現で、このことが他のトルコ族への知識の浸透をたすけている。

- (19) Vyaktin, V. L.: Bulletin of the Russian Committee for the study of Middle and Eastern Asia. Ser II, No. 1, pp. 76-95.
- (20) 史學第二十九卷第四號(三田史學會)二七頁。
- (21) Vambery, H.: Čagataische Sprachstudien, 1867. Leipzig, Einleitung s. 9. 脚註及び ibid.: Alt-Osmanische Sprachstudien, 1901. Leiden. Einleitung, s. 11. 下同様の意味のことがべらべらしている。

四

シャラフールディンアリの《ザファルナーメ》(戦勝書の意)などによると歴大な軍團、完璧に近い規律、巨額軍費を以てティムールは中西亞制覇の道を開拓したが、政治、軍事的に對立したオスマン王朝が世俗的な學問の面の必要性よりティムール王朝から恩恵を被つたのは歴史の皮肉であつた。茲ではアナトリアとマワラン・ナフルの掛け橋となるべき學者群に觸れよう。まず初期オスマン・トルコのメドレセの著名な指導者として知られる通稱、セアデディンテフタザニ、(本名メースト) (A. D. 1322-1389) から説き起そう。この人物はモラヒユスレウアフメッドグラニヤゼンビルリアリエフェンディ、ケマルパシャザデー、エビユスストエフェンディとならび稱せられる高い教養人、有名なミュデルリス(當時の學問センターであるメドレセの教授)で、その名稱は現今に至るまでさまざまな書冊に引あいに出される。ホラサンの *Tafzan* と名づける地域の生れで、ティムールの西進軍團に隨行してアナトリアの地を踏み、そのまま滞留、イズニク(ニケア)やブルサに新設されたメドレセの教授として活動、宗教界に重きをなし、その遺作は、後世までオスマン・トルコの各メドレセで誦讀されている。

また初期オスマン・トルコ思想界に大きな影響を與えた所のフェナリシエムセツティンメフメット(1350-1430)の如きは、⁽²²⁾ティムール王朝治下のマワラン・ナフルのFenarの出身で、後にオマスン・トルコの初代シャイフル・イスラムの重職に就任した碩學であるがムラト二世(A. D. 1421-1451)の時代にオスマン・トルコの由緒ある故都ブルサに來住している。古い文化の中心地、ビザンティンのアナトリアに於ける最後の據點、又詩文や商工業の榮えたブルサは「緑のブルサ」といわれるように樹木に恵まれ桃園や桑樹園の蔭には細流がせらぎ背後にはウルダウ(ケシス・ダウ)の山並みが雲間に聳え、睡蓮の名もゆかしい ⁽²³⁾Niüferの河流に臨んでいた。この富裕な地を取得してイスラムの都市化することが嘗つてのオスマン君公の切望であり、古典史述アシクパシャザード(十五世紀)の《Tevarikh-i Âli-Osman》また恐らくは之れは基くメフメットマウラナーネシリの《Kitab-i Dijhan-nüma, Neshri Tarikhij》とりわけその Hikâyet-i Feth-i Bursa の條によると、包圍半歲の後入手した地域であつた。また嘗つてマルコ・ポロを凌ぐ大旅行家イブンバトウタもカラシ侯國バリケスイル經由にてこの地を訪問している。⁽²⁴⁾フェナリシエムセツティンメフメットは「イスラムの護教者たれ、學問の庇護者たれ」というオスマン王朝の雰圍氣とブルサのこのよ⁽²⁵⁾うな風物とに心を惹かれてかこの舊都に滞留して《Enmüzedj-i il-ülüm》〔學問の形態の意〕と名づける百科全書や《Fusul-i bedayi- fi usul il sherayi》と名づける大著述をなして後世を益し、のみならず學問傳統の、またシャイフル・イスラム職の後繼者として、ファフレツティンシエミエフェンデイ(A. D. 1460歿)の如き有能なる聖職者を殘している。なおこのものもムラト二世の治世からファティフメフメット二世の治世まで約二十年間にわたつてシャイフル・イスラムとして宗教法學界で重要な職責を果している。

こゝに是非とも述べなければならぬのは、そうした初期オスマン・トルコの碩學のうちでも、特に卓越した地位と

高い評價をもつこのブルサ出身のカージザデールーミである。カージザデールーミ正確に言えば、ムサパシヤビンメフメットビンマフムートサラフアルミレットウエアルデーイン (A. H. 759-836, A. D. 1357-1432. 異説もある) は、數學や、天文學の如き精密科學をマワラン・ナフルの學者について直接に學ぶためアナトリアから遙か東方地域に赴き勉學した留學生であつた。

《オスマン・トルコに於ける科學》なるユニークな著述を以つて知られる Abdulkhak Adnan によるとマワラン・ナフル留學に際しては秘められた逸事が傳えられている。その留學に要すべき旅費と學資については義侠に富む姉の助力が大きく、彼女はルーミのため貴金屬や寶石の全部を書冊のうちに匿して持参させたといわれているが、まずホラサン方面にて基礎學を修めサマルカンドに赴いて數學、天文學に関する學を深め有能な學識者としてティムール王朝に出仕した。彼が君寵厚く優遇されたことは拔擢されてミデルリスに任用されたこと、《ゼイジィグルガニ》の作成に献身的に協力したことで知られるが、マフムドビンムハマッドハルズイミ(チャグミニ、フワレズムのチャグミンの生で A. D. 1220 歿) の名高い天文書《Mulahas》の註解や、《Risala fi istihraj djab daradja wahida》〔内容は平面三角法の研究〕ユークリドの幾何學に関する《Ashkal al tasis》〔基本定理の意〕などの著述は豊富な學識の程を示している。⁽²⁶⁾

その發意にて創められたサマルカンド天文臺とそこで養成された學者群がオスマン王朝に及ぼした影響を勘考する場合、この天文臺出身でメフメット二世 (1451-1481) 時代のトルコ學界を代表する天文學者、數學者として令名高きアリビンメフメットアルクシュチュ (A. H. 879, A. D. 1474. イスタンブールにて歿) を挙げなければならぬ。⁽²⁷⁾ タシユキョプリユリユザデーアフメットエフェンディ (A. D. 1495-1550) の《アルシヤカイクアルヌマニエ》

(最も有名な學者やシェイフなど六〇〇名を含む傳記集)によると、クシュチュはサマルカンドに生れ、その父がティムール王朝のウルク・ベクの鷹匠、すなわちクシュチュ職にあつた關係からその名を得たが、有能の故に、カージールデールーミの後を受け繼いで、サマルカンドの天文臺長となり、ウルク・ベクの大事業《ゼイジィグルカニ》の編纂にも參與し、自己の研究を完成せしめるために一時ケルマーンにも赴いている。A. H. 853, A. H. 1449 に、ウルク・ベクが不肖の子アブドルラティフのために暗殺されて後は漂然としてサマルカンドを去り、當時西部イランに覇を唱えていたトルクメン・アク・コユンル王朝 (A. H. 780-908, A. D. 1378-1502) の都タブリーズに滞在したがやがて君公ウズンハッサン (背高ハッサンの意) の大使としてコンスタンティノープルに派遣され、メフメット二世の宮廷に至つた。當時ウズンハッサンは、東部アナトリアに所在するアク・コユンル系統の地方ベクの支配する小邦、すなわち、南部はウルファマルディン、北部はエルズルムシヴァスの線を以つて境界を劃し、ディアル・バクルを首都とし、エルズインジャン、ハルプトなどの屬地を支配するこの小邦を掌握することにより、西部アナトリアを窺い、できうればホラサンから中部アナトリアにひろがるトルクメン大國家を夢想していた。一方オスマン側ではメフメット二世がコンスタンティノープル攻略の余勢を驅つて黒海々岸のスイノプを攻略し次いでトレビンドを合併しようとして東部アナトリアを志向していた。ウズンハッサンはカラ・コユンル部 (シリア派) と異りスニー派であるが宗派の同一性にも拘らずアナトリア支配をめぐつて兩者の衝突は時の問題であつた。ウズンハッサンは疲れを知らぬ精力と權謀術數を用いてメフメット二世を包圍せんとした。

具體的にいえば (1)アナトリアの戰略的樞要地カラマンを勢力圏に收めるためにオスマン王朝の敵對者たる君公イスハクを擁立してメフメット二世の支持する後繼者 (メフメット二世の叔母の子) の排斥 (2)オスマン・トルコの競合者

エジプトのブルジャー・マムルク王朝のスルタン、アル||ザーヒル||サイフ||アル||ディン||フシユカダムとの提携強化
(3) トレビソンド皇帝カロ・ヨハネスの息女で、ダヴィド||コムネノスの姪に當るマリヤ(デスピナ)との通婚 (4) ローマ法皇の使節ロドヴィコの斡旋によるトレビソンドとグルジャとの同盟の促進 (1458) (5) 海軍力を利用するためにヴェネツィア市參事會と政治外交上の協力關係の樹立 (1463) (6) ヴェネツィア市參事會を通じてナポリ王、ハンガリア王、ポーランド王、モルダヴィア君公らとの外交關係の設定などであつた。

そうしたトルコ包圍體制のための外交戰が盛に繰りひろげられていた。このことはベキル||ストック||バイカルの《ウズン||ハッサンのオスマン・トルコに對する萬全の闘争準備とオスマンリ對阿克||コユルルの戰闘開始》²⁸⁾やフランツ||バピンガの《メフメット二世とその時代》²⁹⁾が詳述するところで喋々すべくもないが、ともかくも結果的にはメフメット二世はバヤズイト一世ではなかつた。現イスタンブールのトプカプ||サライ故宮博物館文庫所藏のメフメット二世對ドウルガディル君公、又ウズン||ハッサン對エルズインジャン君公の書翰など一連の往復文書は東部アナトリアの風雲急なる事態をよく傳えている。こうした際に、外交使節と任務を帯びて派遣されたのがアリ||クシユチュであつた。君府に派遣された年代は不分明であるが、事の成否は茲では問題ではない。アリ||クシユチュはその政治的な委託の任を果すと、反つて阿克||コユルルを離れて、メフメット二世の要請にて君府を永住の地と定めアヤ||ソフィヤ附設のメドレセのミユデルリスとなり、スルタンのために數學書《Risala-al-Muhammediyya》や天文學書《Risala-al-Fathiyya》をあらわしその他、文法、修辭學に關する書冊を執筆それらの諸文献を通じて、又直接指導を通じて後進を養成することによつて、オスマン人を感化啓發し、トルコに於ける學問の興隆に貢献した。例えばメフメット二世時代の有能なる宰相で、バヤズイト二世 (1481-1512) 時代にはエデルネのメドレセの教授となつたシナン||パシャ||シナヌッディン||

ユースフ (1440-1486) は天文学や数学をクシュチュから親しく教授された門下生の一人であり、クシュチュの影響のもとに《Tazarrüt》とよばれる名著をあらわして學者宰相の名を留めているのはその例證である。クシュチュの業績は、その著作《Risala-al-Fathiyya》の註解を作成したマフムトミリムチェレビ (1529 歿) によつて受け継がれているが、このミリムチェレビこそは實に上述のカトジザールミの孫に當り更に又アリクシュチュは母方の祖父に當つてゐる。尤もこの説には若干の異説もあり、後世のオスマン・トルコの歴史家ハツチハリファキャティブチエレビの如きは、《Kashf-al-zunūn》〔名高い文献に關する百科全書〕のうちで、ミリムチェレビはクシュチュの甥であると述べてゐるが、ともかくもクシュチュの血縁者であることの推測が可能ではなからうか。バズイト二世が敕命にてウルク・ベクの《ゼイジィグルガニ》に關する註解を命じたのは、このミリムチェレビであり、それは一四九六年に《Dustur al amal ve tashih al djadwal》という題名で著述されてゐる。またこのミリムチェレビはクシュチュがメフメット二世に献上したる天文学的著作《Risala al-Fathiyya》に註解を施して、セリム一世 (1512-1520) に献上しているが、やはり右の血縁と學統關係に基くものであつた。なお又、一五七九年にコンスタンティノープルに始めて、天體觀測所が設けられて新觀測が行われ、それに基づてウルク・ベクの《ゼイジィグルガニ》の内容についても訂正する必要性を認め更に正確化することが行われたことなどはマワラン・ナフル派の基礎の上にたつものと思う。

註

- (22) 上掲、Gösa. 同條項。
- (23) Sabri, F.: Türkiye coğrafyası, 1932. İstanbul, p. 219.
- (24) 前島譯「三大陸周遊記」東京、一、五四—五頁。ブルサ訪問の年は宛もオスマン王朝がいよいよ西部アナトリアに雄飛せんとする年であつた。

- (25) Adnan, A.: *La Science chez les Turcs Ottomans*, Paris, 1939. p. 12-14.
- (26) パリ・ライデンなどの歐州の圖書館は、寫本の「Ashkal-al tasis」が所藏されている。
- (27) 上掲 Gövsa 同條項。
- (28) T. T. K. Bellein, *Cilt XXI, Sayı, 82. Nisan, 1957. p. 285-296.*
- (29) Babinger, F.: *Mahomet II. Le conquérant et son temps*, Paris, 1954. Livre, V. p. 364-451.
- (30) No. 343 のアラビア文 No. 5445 のトルコ文をのぞいては、殆ど凡てがイラン文である。例えば No. 1459, 5433, 8353, 9966, 10001, 10248, 11440, 11676 などの文書がそれである。
- (31) タキ＝アル＝デイン＝アル＝ラシド＝ミスリ (1525-1585) などがこのことに關與している。

五

中世末期頃の東方イスラム世界は西方世界に對して思想に於て、文物に於ていまだ優位の體制を崩していかなかったし、またルネサンス以後にみられるような懸隔をも示してはいなかった。ノーマド的な活力と軍事機動力を以て西方世界を壓倒し去つたところのオスマン・トルコが勃興に際して西方世界に對してみずからを光輝あるイスラムの傳統の相續者を以て任じ心底深くイスラム世界の生み出した學術・文物を持ち續けようと努力したことは察知に難くない。初期よりオスマン・トルコ人は制度構成面すなわち官職名や職掌内容で受けたビザンティンの影響を別とすれば依然東方世界に學術面での精神的郷土を求めて、東方世界に對する依存度が高かつた。すなわちオスマン・トルコ人はアラブ＝イランの協力の結果でもあり結實でもある天地博物誌的な大著述に關心と興味とを寄せ、かつ喜んでそれを自己の知識源とし、そうしたことからアラビア語やイラン語によるコスモグラフィの著述の翻譯に心を傾けたのである。だが實證的な精密科學の分野では新興隆のサマルカンド學派のそれに寧ろ卓越性と親近性を認め、リング・フランカとしてのチ

ヤガタイ文語を通じてイスラムと結びついたトルコ・モンゴルのものを受容しようと努力した。しかもやがて如上兩個の立場はシュレイマーン大帝時代のムスタファアリビン・アリムワッキドの論著のうちで巧みに折衷・合體される結果を示している。少なくともそうした解釋が成りたつと思うのである。

ティムール王朝そのものやこの王朝のもとに開花した文化内容については先學の詳細な縷述があるにもかゝらず、以上述べたような、とくにオスマン・トルコとの學術文化交流を問題點としての論及は殆んど皆無に近い事情にかんがみ、敢えて蕪雜未熟な卑見を寄せた次第である。(一九五九・四・)

〔昭和三十年度文部省科學研究費
(各個)による研究の一部である〕